SPECIAL INTERVIEW

■ 今までの勤務歴

1985. 3　東京慈恵会医科大学医学部 卒業
1988. 4　国立小児医療研究センター
　　アレルギー研究室 レジデント
1991. 3　米国ジョンス・ホプキンス大学医学部
　　内科臨床免疫学教室 ポストドクトラルフェローシップ
1991.10　大学院修了 医学博士
1993. 4　国立小児病院 アレルギー科医員
1995. 4　国立相模原病院 小児科医員
2000. 4　同 医長
2001. 6　同 臨床研究センター 病態総合研究部長
2003.12　同 臨床研究センター アレルギー性疾患研究部長
2004. 4　独法化に伴い国立病院機構相模原病院 臨床研究センター
　　アレルギー性疾患研究部長
2012. 3　東京慈恵会医科大学 小児科学教室 客員教授
2017. 1　国立病院機構相模原病院 臨床研究センター 副センター長
2020. 4　国立病院機構相模原病院 臨床研究センター センター長

世界を舞台に活躍中の“アレルギー疾患”の第一人者

相模原病院 臨床研究センター センター長 **海老澤 元宏**

日本の食物アレルギー診療・研究の第一人者であり、世界アレルギー機構（WAO）の理事長を務めるなど世界を舞台に活躍中の海老澤 元宏先生に、アレルギー疾患に携わる魅力や医師として大切なことなどを伺いました。

日本のアレルギー疾患の中心的役割を担う相模原病院

相模原病院は1999年にリウマチやアレルギーなど免疫異常の高度専門医療施設（準ナショナルセンター）に指定されました。2000年には、現在、私がセンター長を務める「臨床研究センター」が開設され、リウマチ・アレルギー疾患の診療や臨床研究の政策拠点施設としての役割を担うことになりました。当院の「臨床研究センター」は、NHOのなかで最初に設置された臨床研究部となります。

2005年には厚生労働省のリウマチ・アレルギー対策委員会報告書において、相模原病院が日本のリウマチ・アレルギー医療の中心的役割を果たすことが明記され、さらに2017年には厚生労働省より「アレルギー中心拠点病院」に指定されるなど、当院は日本におけるリウマチ・アレルギー疾患における最重要拠点として診療・臨床研究・情報発信・教育研修の中心的役割を担っています。

留学で学んだ食物アレルギーの診療体系を日本全国に普及

私がアレルギーを専門に進んだきっかけは、幼少のころにアレルギーによる湿疹がひどく、喘息発作で幼稚園に半分ほどしか通えなかったことや、医師になったばかりの頃、当直明けに妻が作ってくれた半熟のスクランブルエッグを食べたことで卵アレルギーが発覚したことでした。調べると血液検査で異常はありませんでしたが皮膚テストでは反応があり、振り返ると子供時代に生卵が嫌いでいつも避けていたのは卵アレルギーに因るものではなかったのかと思いました。そうした経験からアレルギーに強い関心を持ち、国立小児医療研究センターのアレルギー研究室に進みました。

その当時、米国におけるアレルギー診療・研究は日本よりかなり進んでおり、アレルギー学会も非常に規模が大きく、そうした場で国際学会の発表を経験したことで米国留学への思いが強くなりました。インターネットのない時代でしたから手紙やFAXで留学に向けたやりとりをし、アレルギー研究のメッカであるジョンズ・ホプキンス大学に留学しました。

留学中は好酸球の研究をしていましたが、当時の日本は食物アレルギーの診療体系が確立されておらず「何とかしたい」と思っていたところ、食物アレルギーを専門とするドクターと出会い、研究と並行しながら食物アレルギーについても勉強する機会を得ました。

帰国後は国立小児病院のアレルギー科に赴任し、留学で学んだ「食物経口負荷試験」を始めました。1995年に相模原病院の小児科に移り、食物アレルギーの診療体系の確立と「食物経口負荷試験」の全国普及に向けた取り組みを続け、2000年には厚生労働科学研究費の受給により食物経口負荷試験食を食品会社と共同開発し、全国の約30施設に無償提供し「食物経口負荷試験ネットワーク研究」を開始しました。血液検査と皮膚テストと「食物経口負荷試験」におけるそれぞれの判定結果には大きな乖離があり、食物アレルギーの管理は「食物

経口負荷試験」に基づいた診断でなければ患者さんのQOLが悪化することを厚生労働省に提議し、保険適応が2006年に実現しました。これにより食物アレルギーにおける「食物経口負荷試験」を一気に全国拡大することができました。

特定原材料の表示義務やガイドライン作成にも携わる

現在、加工食品などにはアレルギーの原因となる卵、牛乳など特定原材料7品目が義務表示となっていますが、義務化前はピーナッツアレルギーの人がカレールーのなかにピーナッツバターが入っていることを知らずに食べ、アナフィラキシーを起こして救急搬送されるなどの事例が起きていました。この特定原材料の表示義務を2001年に世界に先駆けて日本で法制化した際も、自分の主催する厚生労働科学研究班が大きく関わりました。

2005年には、自己注射できるエピペン®(アドレナリン自己注射薬)の食物アレルギーによるアナフィラキシー反応、及び小児への適応取得や、2008年の学校・2011年の保育所における食物アレルギーやアナフィラキシー対応のガイドライン作りに携わってきました。

いま、日本における食物アレルギーの課題は、外食や店頭での対面販売品などの中食においてアレルギー表示義務がなく、自主的な対応に任されていることです。日本では加工食品のアレルギー表示は世界に誇れる制度ですが、外食や中食における食物アレルギーの健康被害が多発しており、改善すべき大きな課題であると感じています。

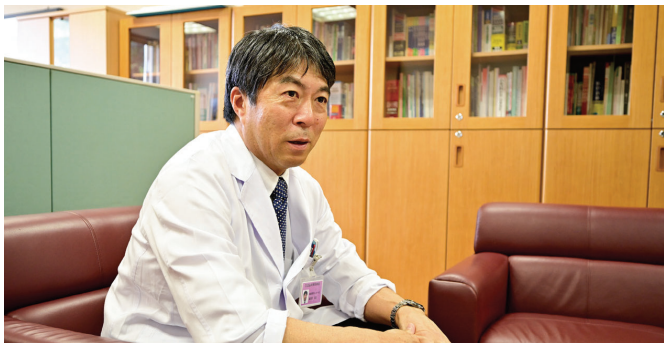
医師教育にも力を注ぎ、アレルギー診療の底上げを

近年、アレルギー疾患患者は増加しており、感染症と同じようにアレルギー疾患も、医師にとって“常識として知っていなければ困る基本領域”であるといえるでしょう。アレルギー疾患は軽症から、最新の治療や管理が必要な重症なケースと幅が広いため、専門施設だけで治療が完結することは難しく、クリニックや各診療科の先生方の協力が不可欠です。

また、アレルギーによる皮膚疾患は皮膚科、喘息は呼吸器内科、鼻炎は耳鼻咽喉科など、日本では成人のアレルギー疾患を臓器別に診ていることも課題でしょう。アレルギー疾患は全身臓器にわたり多種多様な症状を引き起こすため、小児科領域のようにアレルギー科として全身を診ていくことが重要であると感じています。

こうした課題を改善し、医師の底上げによってアレルギーで困っている全ての方々に質の高い医療を提供できる体制を整えていくためには教育が非常に大切であり、相模原病院ではアレルギー疾患に関する医療人への教育にも力を入れて取り組んでいます。

当院では毎年8月に3日間の集中講義形式で全国のアレルギー専門医を目指す医師に向けた「相模原臨床アレルギーセミナー」の開催や、NHOグループのスタッフ向けに2週間の実技も含めた研修なども実施しています(コロナ禍ではオンラインによる実施)。



また、知識だけではなく実地研修も重要であり、アレルギー専門医資格取得に向けた研修はもちろん、小児・成人の総合アレルギー診療の基礎を学ぶ年単位の研修プログラムも用意し、全国はもとよりタイ、台湾、中国、イランなどの海外からも医師の研修を受け入れています。

医療に対して常に考察しガイドラインをつくる側に

かつてアレルギー疾患の中心は喘息でしたが、近年は吸入ステロイド(ICS)や生物学的製剤の登場により、今では紹介患者さんのほとんどが喘息以外の食物アレルギー等となるなど、疾患構造の変化が起きています。

治療でいえば、たとえば50年前には胃潰瘍は胃の部分摘出手術、その後H_2ブロッカーでしたが、現代においてはピロリ菌の除菌が行われ、手術をすることは非常識となりました。アレルギー領域では、好酸球性副鼻腔炎の治療が手術以外にも生物学的製剤による薬物治療が可能となるなど、医療は日進月歩であり、常に知識をアップデートし続けなければ時代に取り残されてしまうでしょう。

また、医学生や若手医師時代は教科書やガイドライン通りの知識の習得に追われ、フローチャートやアルゴリズム通りの診療になりがちです。ガイドラインはできあがったものではなく、研究の進歩によって常に動いているものであることを認識し、常に“考える”医療をすることが重要です。ガイドラインにあてはまらない事象だからといって目をつぶることなく、ちょっとしたことに診療の大きなヒントが隠れており、新たな発見があったりと、どんな些細なことでも立ち止まって突きつめることが、臨床でも研究でも非常に大切なことです。

相模原病院は、成人、小児ともにアレルギー診療において日本有数の患者数を誇ります。2005年から患者情報をデータベース化し、15年以上のデータ蓄積や血清バンクを有しているなど、臨床研究や海外との共同研究もできる医療資源が豊富です。アレルギー領域における“診療ガイドラインをつくるための信頼性の高いエビデンスをつくる医療機関”であると自負しています。また、私が医師として幸運だと思っているのは、相模原病院という臨床研究機関を拠点として常に世界の最先端と交流ができ、若い医師と共に海外の最新論文を読んだり、国際学会へ参加するなど、知識の更新が自然とできる恵まれた環境にいることです。

こうした環境は若い医師の方々が、将来、臨床や研究で新たな道を切り拓くなど、医師として大きく活躍できる素地をつくるに相応しい病院であると自信をもっていうことができます。

アレルギー分野はまだまだ未知なことがたくさんあり、好奇心旺盛でアグレッシブ、新しいことを見つけるのが面白いと感じる方にとっては非常にやりがいのある分野ですし、若い先生方には分野を問わず「自分がガイドラインをつくるんだ！」という気持ちで医療や研究に臨んでほしいと思います。

PROFILE

出身地：東京都
出身大学：東京慈恵会医科大学(1985年卒)
宝物：人とのつながり
座右の銘：自分の限界を設けない